

自由な感想も、ツッコミもOK!

日本絵画は、楽しく見よう

日本の絵は、とっつきにくい?

いえいえ、それは単なる思い込みみたくです。

「かわいい」「おとぼけ」「へそまがり」など、ユニークな切り口で

江戸絵画を紹介し続ける金子信久さんに、見方のコツを聞いた。

府中市美術館学芸員

金子信久

●かねこ・のぶひさ 1962年東京都生まれ。専門は江戸時代絵画史。『ねこと国芳』（バイ インターナショナル）『作家別 あの名画に会える美術館ガイド 江戸絵画篇』『日本おとぼけ絵画史 たのしい日本美術』（ともに講談社）など、著作多数。

窓を少しずつ広げる

美術館の学芸員は、美術を大勢の人に紹介するのが仕事です。そうした仕事は出版人や研究者なども担っていると思いますが、私の場合は美術史学に携わってきた人間なので、美術を紹介しようとする、美術史のものの見方をなるべくわかりやす

いかたちで知ってもらおうと、つい思ってしまうがちなんです。

けれども、美術史学は美術を捉えるための一方法に過ぎず、美術を楽しむすべてではない。ですから、美術の紹介に関わる人間として、学問の世界を押しつけるのではなく、いろいろな切り口で作品の魅力を伝えていきたいと考えています。

その一つが「かわいい」という視

点で、二〇一三年には「かわいい江戸絵画」という展覧会を府中市美術館で開催しました。いまでこそ「かわいい」をキーワードにした美術館や本はたくさんありますが、当時はまだそういう言葉でくくった展覧会も本もなく、企画段階では心配だらけでした。展覧会のためにはいろいろな方から作品を借りてこなければならぬんですが、「かわいいの意

味がわからない」と言われたこともあり、展覧会初日の前日に作品を並べ終えた会場を眺め、いつもなら「できた!」と思うのが、このときばかりは「お客さんが全然入らないかもしれない」「不謹慎だと業界から袋ダタキにあうかもしれない」と、ただただ不安でした。

けれども、ふたを開けてみたらそんなことはまったくなく、お客さんはいつもの二倍。図録も売り切れたうえ、展覧会後もほしいという方が多かったので、その後、出版社から一般書籍としても発売されて、それも何度か版を重ねています。

なかには、「何でもかんでも、かわいいって言えばいいってもんじゃない!」という人もいるかもしれないが、「とっつきにくいと思われるってきた日本美術にも、かわいい部分がある」という見方が、いままで疎

遠だった人、そのよさがわからなかった人と日本美術の出会いのきっかけになってくれればと思います。あるいは、かわいいと思っていたけれど、美術作品をそんな目で見てはいけないと思っていた人たちに、「かわいいと思っていたんだ!」と思ってもらえたら、うれしいですね。そうやって、美術の世界に近づける窓を少しずつ広げていくのが、私たちの仕事ですから。

「かわいい」から見えてくること

「かわいい」という視点を思いついたのは、ファッションやキャラクターなどの世界が「かわいい」ブームだったからというわけではありません。山水画や人物画など、さまざまなか切り口で江戸絵画を紹介してきたなかで、自分で選ぶ展示作品に「な

んか、かわいいな」と思うものが多かったんです。それとは別に、あるとき「府中市美術館の展覧会って、かわいいものが並んでるよね」と言われたことがあって、「やっぱりかわいいんだ!」と、ちょっと自信を持ったんです(笑)。それで、「かわいい」という切り口を正面から扱ってみてもいいじゃないかと考えるようになったんです。

かわいいといえは、円山応挙は子犬の絵をたくさん描いていて、誰が見てもかわいいと思うようなものばかりなんです。応挙という立派な山水画や花鳥画というイメージが根強く、子犬の絵はおまけのような扱いを受けることがほとんどでした。明治以降の近代芸術では、画家の苦悩や激情を表現してこそ芸術だとされ、同時に、芸術は高尚な学問であるという考え方が広がったため、